

日本賞

教育コンテンツ国際コンクール

音と映像を駆使した教育コンテンツが世界中から集まる国際コンクールです

「日本賞」レポート

上映・プレゼンテーション・ディスカッション

生涯教育カテゴリー、児童向けカテゴリー : 災害から何を伝えるか

災害からはどんなテーマや問いを伝えられるのでしょうか? メディアのプロフェッショナルにとって、メッセージの伝え方に関する目標や責任は何なのでしょう? モデレーターのニアマン氏は、それぞれ異なるスタイルやアプローチで制作された5つの作品についてディスカッションを行いました。彼女はメディアのプロフェッショナルとして、「私たちは、報道することに意味付けをする立場にいる。また、その意味付けは、私たちに何が起きているのかを理解しやすくするものでないといけない」と話しました。

「嵐のあとに～隆華小学校の子どもたち～」(客家Linear (Hakka TV)/台湾)と「NHKスペシャル『巨大津波 “いのち”をどう守るのか』」(日本放送協会(NHK)/日本)が討論で中心的に扱われ、災害からのメッセージを子どもたちに伝えるという繊細な問題に焦点が当てられました。会場からは、「テレビは常に番組を流して、多くの子どもたちがそれを見ている。私たちはそのことを心に留め、制作に取り組まなければならない」という声が出ました。

モデレーターのニアマン氏は、「伝える内容が子どもたちに伝えにくいものだとわかっているとき、伝え方には本当に繊細にならないといけない」とコメントしました。彼女はまた、子どもたちの扱い方には、文化的な違いも反映されるのかもしれないと付け加えました。

こうした災害報道をまだ経験したことのないプロデューサーへの助言を求められると、NHKのプロデューサーは、番組の放送前に、視聴者に精神的なショックを与えるのではないかなどの懸念があったと語りました。しかし、結果として、避難所で番組を見た人たちの中には、正確な情報を提供することで、区切りをつけて新たに人生を歩んでいく手助けをしてくれたと、プロデューサーに感謝する人もいたと話し、「大事なのは、正しい情報を伝えることだ」と述べました。

セッションの最後で、ソーシャル・ネットワーク・メディアの使用の重要性についてのコメントがありました。ニアマン氏は、東日本大震災の間、ボストンにおいて、ニュースがTwitter上でテレビよりも早く伝わっていた例を挙げ、「ニュースがテレビで流れるまでには時間かかってしまう。テレビはより深く、より長い情報を伝えるのに大事なツールだが、災害報道については、デジタル・メディアが重要性を増している」と語りました。



メレディス・ニアマン
WGBH教育財団(PBS)
国内番組 デジタル推進 局長
アメリカ

モデレーターからのメッセージ

ジョージ・オークランド氏(元BBCラーニング 学習開発局長/イギリス)

「膨大な数の制作手法を見てきました。重要なのは、『イマジネーション』に尽きます。イマジネーションは、制作会社の規模が非常に小さければ、より効果的に成り得ます。本当に良い作品に必要なのは、たくさんのイマジネーションと、優れたストーリーラインです」。

メレディス・ニアマン氏(WGBH教育財団(PBS)/アメリカ)

「オークランド氏に同意します。そして同時に、この数日間で、私は歴史番組が再び活気づいてきているのに気がきました。歴史を扱った作品は、過去を現在へとつなげています。私の所属する機関も沢山の歴史番組をつくっていますが、他の機関の方々が制作した現在を過去とつなぐ番組を見られたのは良いことでした。また、次は災害とメディアに関するディスカッションを、もっと詳細に行ってみたいと思っています」。

ヤンウィレム・ブルト氏(キリスト教放送 青年部部长/オランダ)

「優秀な番組は、私たちが大事にしなければならないものです。教育番組は、古典的な学校教育番組から、より魅力のあるものへと変わりつつあります。『日本賞』で見てきた作品のターゲット層の豊かな多様さは、とてもよく印象に残っています。強い情感と深く練られた作品は、私たちが普段行っていることについて考え直させてくれます。それこそが、私たちがここで意見や情熱を交わす理由なのです」。



左からブルト氏、オークランド氏、ニアマン氏

10/27 本日のスケジュール

授賞式に参加されない方は、474会議室・参加者ラウンジにて、東日本大震災プロジェクトの作品上映をぜひご覧ください！

時間	イベント	場所
10:00	受賞者発表 (各カテゴリー最優秀賞・特別賞)	CA421オーディションルーム
10:05	受賞作品上映	CA421オーディションルーム
16:00	授賞式 (審査委員、ノミネート作品制作者、モデレーター、招待客)	
18:30	受賞者パーティー	22階

審査委員からのメッセージ



インベティブ・メディア
カテゴリーリーダー

アメリカ

コリーン・ウィルソン
KQED北カリフォルニア公共メディア
インタラクティブ部長

2011年は、インベティブ・メディアカテゴリーにとって最初の年でした。つまり、正式なカテゴリーとして確立されたばかりなのです。今年のエントリー作品群は、最高の作品価値を持ったオンライン・ビデオに小説のマルチスクリーンのインターフェース、洗練されたゲームから、途切れないソーシャル・メディアとの統合まで、高いレベルの質と洗練さ、創造性を誇っていました。

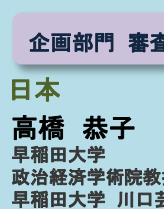


コンテンツ部門
審査委員長

カナダ

デボラ・ドリズデル
カナダ国立映画制作庁 (NFB)
デジタル推進 局長

今回審査したコンテンツは、勇ましく、堂々としていましたね。私たちの先入観に挑戦し、重要な問題について色々な視点から考えさせてくれました。審査委員たちに共有されている価値観と「日本賞」の目標は、多様なバックグラウンドと視点を持った審査委員たちの道しるべになりました。そしてそれは、素晴らしい意見交換やディスカッション、笑いをもたらしてくれることになったのです。



企画部門 審査委員長

日本

高橋 恭子
早稲田大学
政治経済学術院教授
早稲田大学 川口芸術学校校長

「教育」とは何かを考えさせられた一週間でした。「日本賞」での「教育」は学校教育と異なり、視聴者が作品を通じて、現在直面している問題を主体的に読み取り、考えることだと理解しました。賞に値する作品は、視聴者にそのきっかけを提供する作品だと思います。文化的背景や社会経験が異なる審査委員が一室に会する審査会では、多様な意見が飛び交い、作品選定は難航しましたが、それが審査の醍醐味と言えます。

「日本賞」に参加して



マレーシア

Pushparani Subramaniam
Educational Technology Division,
Ministry of Education

多くの新しい制作手法や、教育を人々に届けるための色々な方法を知ることが出来ました。世界のあらゆる地域で、それぞれ異なるプラットフォームを使いながら、様々な作品をつくっている人たちが集まると、制作手法の多様さを実感できます。



スウェーデン

Emil Erdtman
Swedish Disability Federation

ディスカッションが一番面白いですね。議論をして、世界中から来た人たちの様々な意見を聞くことは、実り多いことです。国・地域や業界など、異なるバックグラウンドを持つ人たちとの議論は、自分にとって良い学びのプロセスになっています。



インド

Sailaja Suman Malladi
Doordarshan India

デリケートな問題をどう扱うか、また、ナレーションの使用法の多様さなどを「日本賞」で知ることができました。さらに、災害についての作品を見た時は、常に最悪の事態に備えないといけないと思いました。今回学んだことを生かしたいと思います。



ブラジル

Helio Ciffoni
SOFTEX

「日本賞」への参加は二回目になります。「日本賞」は制作者にとって、とても重要なミーティングの場です。来年はブラジルからもっと多くの人を招待して、ディスカッションでの意見交換を活発にする手助けをしたいです。



台湾

Sheng-Jung Tang
Chia-Chi Wen
Hui-Ling Cheng
Hakka Television Station

「日本賞」では、様々なスタイルの作品を見ることが出来ます。様々な文化によって、それぞれ異なった作風の作品がつけられています。国が違えば、考え方も違うのですね！



韓国

Ho Lee
Educational Broadcasting
System (EBS)

初めて「日本賞」に参加しました。クロスメディア・フォーラムは、TVプロデューサーにとって、外国のプロデューサーの方々に自分の作品を見ていただき、リアクションをもらえる良い機会です。色々な国の人と交流したり、意見を交わせるのも良いですね。